

知床保全状況報告書（抜粋）（案）

【決議項目 5】

サケの移動及び産卵の永続的な障害物を除去するための選択肢の更なる議論及び分析が現在進行中であることに留意し、また、ルシャ川の3つの砂防ダムの防災上の便益よりもそれらが資産の OUV に及ぼす影響の方が大きいことを想起し、締約国に対し、資産を可能な限り最も自然な状態に回復するための努力を継続及び強化するよう強く勧奨する。

（報告案）

○基本的考え方

知床世界自然遺産は海域と陸域の生態系の相互作用が高く評価されたもので、核心地域に位置するルシャ川におけるサケ類の移動及び産卵環境の改善は、非常に重要であると認識しており、可能な限りサケ類の移動及び産卵環境の改善を促すような自然の状態への回復を図っていく考えである。

一方、河口域では地域の主要産業である沿岸漁業が営まれており、定置網など漁業施設への土砂や流木による影響防止と、地元漁業関係者の災害時における安全及び日々の移動経路の確保を図る必要がある。

このため、ルシャ川において、河口域で沿岸漁業が営まれている限り、サケ類の移動及び産卵環境の改善と、漁業活動や漁業関係者の安全の確保との両立を図る考えである。

○進捗状況

上記の基本的考え方の下、2016年（平成28年）11月に提出した前回の保全状況報告書の内容に基づき、知床世界自然遺産地域科学委員会の下に設置されている河川工作物アドバイザーパネルの助言を得ながら、具体的な方策について検討をすすめてきたところであり、前回の保全状況報告書に記載した2019年（平成31年）の報告に代えて、第41回世界遺産委員会の決議に基づき、進捗状況をここに報告する。

1 3つの治山ダムについて

ダム区間を含む350mの現地状況を再現した1/50スケールの水理模型実験と、河口から800m上流までの範囲の数値シミュレーションとによって、ダムを完全撤去した場合と一部撤去（中央部を地中部分を含めて40m幅で撤去）した場合のそれぞれについて、流路や土砂流出量の変化等を予測し、河川の自然状態の復元や防災機能の維持の観点から両者の比較を行った。

その結果は以下のとおりであった。

- ・ダムを完全撤去した場合は、流路の複線化、網状化、伏流水の復元により、河川はより自然な状態になることが分かった。一方、ダムが果たしていた防災機能が失われるため、土砂や流木の流出により、河口部での定置網を用いた沿岸漁業や漁業関係者の日々の移動経路への被害の増加が懸念される。
- ・ダムの袖部を残しつつ中央部を地中部分を含めて40m幅で撤去した場合（前回報告書の別添1参照）、ダムの防災機能はさほど低下せず、水流の複線化・網状化が起こることが分かった。このため、サケ類の産卵環境の改善が期待できる。また、撤去部を通してサケ類の遡上が容易となる。

これら水理模型実験及び数値シミュレーションの結果を踏まえ、3つの治山ダムについては、ダムの中央部を地中部分を含めて40mにわたり撤去することとした。

ただし、3つのダムを一度に撤去すると、土砂移動が急に起こり、下流に過大な影響を与えることが懸念されるため、ダムの撤去は、その効果をモニタリングしながら、上流側のダムより段階的に行っていくこととしており、具体的なダム改善方針は、2019年（平成31年）中にウェブサイトに掲載する予定である。

なお、2018年（平成30年）に漁業関係者に対しこの方針について説明を行い、同意を得たところである。現在、具体的な施工方法や施工時期について、漁業関係者と協議中である。

2 ルシャ川を横断する道路及び橋について

第39回世界遺産委員会の決議で勧告を受けた道路及び橋の撤去については、川底に石を敷き詰めて河床路を水面下に作設することにより、サケ類の遡上を妨げることなく地元漁業関係者の日々の移動経路の確保が可能となるか検討している（前回報告書の別添2参照）。

2018年（平成30年）に、河床路が橋の代替として機能するかを検証するための実証試験に着手したところである。実証試験の終了後、その結果について漁業関係者の理解を得て地域社会と合意形成しながら、河川工作物アドバイザーパネルの助言を得つつ、道路及び橋の取扱いについて決定する予定である。

【決議項目6】

本件についての更なる助言を提供するために、おそらくはIUCN/SSCのサケ科魚類専門家グループとの合同による、IUCNの諮問ミッションの招聘を検討することについての勧告を改めて表明する。

（報告案）

諮問ミッションについては、サケ類の遡上時期である秋を念頭に早期に招聘する方向で、関係行政機関において検討中である。